オンライン展覧会　補助資料「北海道の時代区分」

<table>
<tr><th colspan="2">本州</th><th colspan="3">北海道</th></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">旧石器時代</td><td colspan="3" rowspan="2">旧石器文化</td></tr>
<tr><td rowspan="6">縄文時代</td><td>草創期</td></tr>
<tr><td>早期</td><td colspan="3" rowspan="5">縄文文化</td></tr>
<tr><td>前期</td></tr>
<tr><td>中期</td></tr>
<tr><td>後期</td></tr>
<tr><td>晩期</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">弥生時代</td><td colspan="3" rowspan="2">道南　　道東
続縄文文化（前期）</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="3">古墳時代</td></tr>
<tr><td rowspan="3">続縄文
文化（後期）</td><td rowspan="5">オホーツク
文化</td></tr>
<tr><td colspan="2">飛鳥時代</td><td rowspan="4">擦文文化</td></tr>
<tr><td colspan="2">奈良時代</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="3">平安時代</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="7">アイヌ文化</td></tr>
<tr><td colspan="2">鎌倉時代</td></tr>
<tr><td colspan="2">南北朝時代</td></tr>
<tr><td colspan="2">室町時代</td></tr>
<tr><td colspan="2">安土桃山時代</td></tr>
<tr><td colspan="2">江戸時代</td></tr>
</table>

表 1 北海道の考古学区分　（瀬川拓郎 2016『アイヌと縄文ーもうひとつの日本の歴史』 ちくま新書　19 頁）一部改変

【旧石器時代（文化）】

約3万年前の氷河期だった日本に、マンモスなどの大型獣を追って移動しながら暮らしていた土器を使用する前の文化を「旧石器時代（文化）」と呼びます。

【縄文時代（文化）】

約1万5000年前に気候が温暖化し、植生や動物相が大きく変化し、「縄文時代（文化）」が始まります。

木の実などの植物性の食糧を利用するようになり、それらを煮炊きする土器も発達し、定住性も高まりました。

【続縄文文化】

3000 年ほど前に、九州北部で水稲耕作が行われる弥生文化が成立。2500 年ほど前にも東北北部で行われるようになったが、北海道では受け入れられず、本州とは異なる文化を形成します。本州での弥生・古墳文化にと並行する北海道での文化を「続縄文文化」と呼びます。

【オホーツク文化】

5～13世紀にサハリン南部から北海道オホーツク海沿岸、千島列島にかけて展開した文化を「オホーツク文化」と呼びます。この文化は海洋適用した文化であり、文化圏内に入ってきた擦文文化の影響で誕生したトビニタイ文化を最後に姿を消しました。

【擦文文化】

7世紀に入ると、本州の影響を受けた「擦文文化」が誕生します。土器は本州の土師器を模したもの、住居は穀物調理用のかまどを持つ竪穴住居になるほか、交易が活発となり、農耕も行われるようになりました。

【アイヌ文化】

鎌倉時代以降に並行するアイヌの文化です。13世紀以降になるとふたたび、本州の影響を強く受け、住居は本州と同じ、平地式になり、本州から鉄鍋や漆器碗が流通し土器が使用されなくなりました。

【参照文献】

・瀬川拓郎　2016『アイヌと縄文　もうひとつの日本の歴史』ちくま新書　17～21頁
・川上淳他　2018『増補版　北海道の歴史がわかる本』亜璃西社